

吸血鬼ちゃんとドキ☆らぶ日常生活♡

吸血鬼好きのファミマ店長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通に生活を送っていた主人公「悟」の目の前に現れた、凜蝶と名乗る吸血鬼。

悟はどうなってしまうのか。

目次

〜現実編〜	1
〜魔界編〜	15
〜天界編（第1の部）〜	23

〈現実編〉

一章 『自称吸血鬼現る』

俺は普通に中学生生活を送っていた。

ある日、その生活は幕を閉じた

こいつが現れるまでは。

それは唐突だった。

「お前、うちに血をくれないか？」

と、凜蝶と名乗る吸血鬼が俺に言ってきたのだ

感動的な出会い…でも何でもなく

ただ現れたただけだ。

なのに、何かを感じた

こいつ…俺に似てるな、と。

「ところで…何でここに？」

俺は質問してみた

「血が欲しいからだ」

即答された。

「いや、ここに来たりゆ」

「血が欲しいからだ」

何を聞いても普通に返された。

(なんでこうなるのおおお?!)

そして、血を吸われる生活が始まった。

今日もまた、血を吸われている

鉄分をくれええええ

とかずっと思いつつながら。

「お前美味いなー!」

とか言ってるけど人間にはわからん

「そーなんだー」

とりあえず返しとく

こいつは見事に学校に来た

てか転入してきた

どこのアニメフラグだよ…
と思ったことは静かにしておく
これから先、俺どーなるの？
と思った矢先
隣が凜蝶だった。
とてつもなく嫌な予感しかない。
どうにかして逃げたい
神様に願った夜が3週間続いたことは
言うまでもない。
「助かりてえ…」
俺は涙目で、空に言った。

二章 『平和、行方不明中』
血を吸われながら生活している俺だが、唯一の友達とも遊んでい
る。

「よっ！きとっち！」

「おお！健ちゃん！」

こいつの名前は新嶋 健太郎。

小学校からの幼馴染みである彼だがもう1人、幼馴染みがいる。

「あー！きーちゃんだ！」

「一緒のクラスで良かった！」

「あとケンタウロスもいるんだ！」

こいつは清村 理緒。俺達のムードメーカー的存在だ。

面白くて、みんなを明るくしてくれる。

「その名前で呼ぶな！」

健ちゃんが言った。

やはりケンタウロスは嫌なのか。

いや…誰でも嫌か！って納得しとこう。

家に帰った俺は、リビングに行く。

すると後ろから凜蝶が現れ、

「ねえ！血いちよーだい！」

紛れもなく人間離れした話だった。

「嫌だ」

とりあえず断ってみる

「吸わせろ」

即答。

仕方が無いので吸わせる事にした。

必死に吸っている所を見ると、

なぜか可愛いと思えてくる。

それは10分程続くのだが：

こいつの心拍数が上がってる気がする。

「おい、心拍数上がってないか？」

「そお〜かもお〜」

赤くなった顔で言ってきた

熱かと思っただが、熱はない。

「なんで赤いんだ？」

と、呟いた

すると凜蝶が

「なんか〜君といると〜」

「凄いでドキドキして〜」

「身体：熱くなるの〜」

完全なる好意だと察した俺は、

覚悟を決めて聞いてみた。

「お前：俺の事好きか？」

「うん！大好き〜！」

やっぱりか。

なんか驚きすぎて声が出ねえ。

まず、吸血鬼に惚れられたことが無い。

「ねえ」

急だった

「何？」

「うちと…付き合って?」
「?!」

あまりに急すぎて反応が遅くなった
だが…断ったら何されるか分かんないので
「いいよ。付き合おう。」

心無しか言っていた。

「やっつったー!」

「よろしくねー!」

「あ、うん。よろし」

ガバツ

(?!)

凜蝶が、抱きついてきた。

こいつ地味に胸がデカいから当たる。

俺は悟った

(こいつ…エロい?!)

こうして吸血鬼との生活、というか
ラブラブと言わざるを得ない生活が始まった。

三章 『恋愛はスタート位置へ』

こうして吸血鬼との恋愛が始まった…のはいいが
とてつもなくべったりだ。

「ぎゅーしてー!」

「子供かっ」

「ねーえ!」

こんな会話が毎日続く。

「むう…」

「仕方ないなー」

そして凜蝶に抱きつく。

「はにゃあ〜♡」

猫のような声を出して喜ぶのだが…

それがとてつもなく可愛い。

(てか何だよこのいい匂い！)

そして胸が大きい分下を向くと谷間が見える。

どうしてもずっと見てしまう。

とうとう変態になったか、俺。

いやいや、そんなはずはない

自分にツツコミながら凜蝶を離す

すると凜蝶が

「ねえもつと〜」

なんだこのオネダリ星人モットマンは。

1回で終わらせたい俺は聞いた。

「何をすればいい?」

「えーつとー…キス!」

「はあ?!」

キス? いや何でそうなる?

「やってー?」んー

いやいや準備体制に入るなよ

仕方が無いのでやってやる。

「ぎゅーしちやえー!」

しまった。罨だった。

その後、遊ばれまくった俺だが

「お風呂入ろー?」

「いってら」

「いや、だから一緒に入ろ?」

「は?」

いやいやいや

何故そうなるんだ吸血鬼よ

思春期の男女が共に風呂に入るって

どういう頭してんだよっ!

「やだ」

「えー!」

「入ろーよー!」

「やだ」

「むうー!」

よし、諦めた。

さー俺はスマホでもつとー

テクテク

なんだこの音は

テクテク

RPGみたいな音立てんなよバカ

ポスっ

まて、隣に座ってるの誰だ

この髪の毛匂い、そしてオーラ

…間違いなく

「凜蝶何してんだ」

「入ろ」

バスタオルを身体に巻いて準備したのか

って待て?バスタオル?

まさか…この下はっ

HA・DA・KA?!

そんな期待は置いといて。

「入らないって言ってるだろ」

「身体で言うこと聞かせる」

むにゅっ

あ、この感触…

そーか。俺の腕は谷間に入ったか。

って谷間?!

見ちゃダメだ、絶対ダメだ。

「あの一…凜蝶一…」

うるうる

なっ…泣いてる?!

入るしかないのかこれは

「入ってやるから…泣くなよ」

「わーい！」

ペロっ

「待て待て待てタオルが、タオルが！」

「んー？」

「別にいいじゃーん♡」

ぎゅー

(やめろ。理性飛びそうになるから。)

…というわけで風呂の中にいる。

やはりタオルだ何だという事より

こいつの胸の大きさが非常に気になる

「お前バストどれくらいだよ…」

「え？」

(しまったっ！口に出たっ！)

「うちねー」

「Gだよー」

「へえー、Gなんだー」

(ってG?!)

人間じゃねえ…

※そもそも人間じゃないです

「触るっ？」

「いや、いいい」

「おっけー」

それよりも…

耳をかぶってほしい！

可愛い声出そう！

「…」

かぶっ

「ひにゃあっ?!」

はむはむ

「にゃ…ダメえ…」

やっぱ…エロいw

「ごめんごめん」

「むー」

「許可とってからやってよー!」

「わかったわかった」

あ、でもやる事に関してはOKなのね

そして、風呂から出て寝ようとしてるのだが…

「ふふーん♪」

「何でお前がここにいんだよ」

「一緒に寝るのも日課だにゃ♪」

とんだ奴と付き合った…

腕に抱きつかれているため

俺は寝れない。凜蝶はぐっすり。

時々顔が耳元に来るのがドキドキする。

一言で表すと理性が飛びそう。

四章 『エロと俺と吸血鬼』

光がカーテンから射し込む

「朝か…」

横を見ると吸血鬼が寝ている。

「可愛いなあ」

俺は呟いた。

こいつの事、好きになりそうだな

自覚してた。さすが俺。

朝ごはんの支度をしていると、凜蝶が起きてきた

「やとる…おはよ…」

「おはよ。」

初めてこいつが俺の名を呼んだ

ト「ト」

凜蝶が俺のところに来た。

「何？」

「いや…ねむい…」

「じゃあ寝てこいよ」

「さすると寝たい…」

討論終わり。

「じゃあご飯食べたらな。」

「うん…」

ご飯を済ませて布団に入る。

凜蝶が寝て、俺はそこから離れようとした

その時だった。

「やあ、恋人さん」

「誰だ？」

「あたしの名はジザベル。」

「闇の女王さ」

「…ごめん話に付いてけない」

「それはすまないね」

「ご飯食べる？」

「是非とも」

そして、闇の女王とやらはご飯を食べた。

「あんた…凜蝶の恋人だって？」

「ええ、まあ一応」

「ふうん」

「付き合ってるのがどんな奴なのか、知ってるの？」

「吸血鬼なんじゃないですか？」

「いや、あの子は魔界の頂点に立つ人だよ」

「へー」

驚くどころか反応ができない。

「凜蝶のこと、好き？」

「ええ、寝てる顔が可愛いですよ」

「あんた…驚かないの?!」

「ええ。冷静さには自信があります。」

「全く驚いたわねー」

いや、実際俺が1番驚いてるわ

「ま、凜蝶をよろしくね」

「あ、はい」

「あと、服装バスタオルにしたから(？▽？)」

「え？」

「そゆことで」

帰ってった。

どういう意味なのか分からない。

とりあえず凜蝶のところに戻ってみた。

「…なるほど、そういう事か」

凜蝶の寝間着が：バスタオルになってる。

やばいタオル剥がしたい。

「んあ…」

「あ、起きた？」

「…?!」

「ねえ何この服装！」

「ジザベルって奴がやってたー」

「あのババア…」

「(？・ω・？)じー」

「な、何？」

「いや、エロいなーって」

「？」

「胸、触りたい？」

「え、いいの？」

こんな事聞かれるのは初めてだ

「ほら」

(さすがに生ではないか)

むにゅっ

「はぁうっ」

「あ、ごめん」

「大丈夫…」

「ちよつと感じちやっただけ…」

（いや、普通にエロい）

むにゅむにゅ

「いやっ…あっ…」

「そろそろやめるね」

「あ、うん…」

（もつと触って欲しかったな）※凜蝶

「着替えな」

とりあえず服を渡し、俺はリビングに行く

凜蝶はバスタオルのまま俺の手を掴んで付いてくる

「着替えないの？」

「後で着替える」

なんかエロいから着替えて欲しい

「ふー」

「疲れた」

テレビポチッ

「…」

「ん？凜蝶どうした？」

と言った瞬間、凜蝶が膝の上に座ってきた

バスタオルで。

向こう向いて。

「どうしたの？」

「…って」

「？」

「…ってして」

「なに？」

「ぎゅーってしてー！」

「あ、うんわかった」

言われるままに抱きつく

「ねえさとする」

「なに？」

「…大好き♡」

「?!」

急すぎてびっくりした

でも落ち着く…

「さとする、ありがとう」

「うち…婚約させられるの」

「な?!」

俺の口から出た

「お前は俺のもんだバカヤロー!」

「っ!?!」

「誰にも渡さねえよ!」

俺は叫んだ

「なんだ…眠い…」

俺は…目を閉じた。

五章 『消えた愛人』

「…?!」

凜蝶が、いない

「凜蝶は?!」

「魔界に連れてかれたよ」

ジザベルが言った

「何で?!」

「婚約させられるって言ってたろ？」

「それでだよ」

驚きと共に悲しみがこみ上げてくる

「助ける方法は無いのか」

「あんたが魔界に行くしか」

「連れてけ」

俺は躊躇なく言った

「あなたの命が無くなるかもしれない」

「連れてけ！」

↳魔界↳

愛し合うと神に誓いマースか？

王子「はい」

凜蝶「…」

「姫？さあ。」

「…」

バアンツ※扉を開く

凜蝶「?!」

俺は…最大出力で叫んだ

「俺の恋人を奪う奴は誰だアアア!!!」

「さとりー！」

「凜蝶…来い！」

「うん！」

王子「待て」

王子「お前は誰だ」

「凜蝶の恋人だよ」

「型にはめられてない」

「本物のな」

王「認めないぞー！」

王「取り返せ！」

「無駄な足掻きを…」

「ザ・ワールド」!!

(時よ、止まれ。)

※兵士蹴散らす

(そして時は動き出す)

兵士「ぐあああああ!!」

王「なにが起きたっ!!」

「これが、本当に愛してる証拠だよ」

そして俺は…凜蝶にキスをした。
「?!」

そりゃ驚くよな。急にされるんだからw
そのまま舌を入れた。

(完全なディープキスの完成だな)

「さ…とる?」

「連れ戻す。」

「待ってる。」

「うん…」

そして、指を鳴らし

瞬時的に家にワープした

「さとる…さとるなんだ…」

何言ってるんだこいつ。バカか。

「急に消えるなよバカ野郎」

「さとるーーーーっ!」

ぎゅーーーー

「怖かったよ…」

無理もない。無理やり婚約させられるからな。

「多分、追いかけて来るだろ。」

「風呂、一緒に入るか?」

「うん!」

そしていつも通り風呂に入り

いつも通り寝た。

く魔界編く

一章『愛を求めるセカイ』

俺は悟。吸血鬼と付き合ってるのだが、訳あって魔界に来てる。

「凜蝶…ここになんで来たの？」

「知らーん♪」

「デートしたかったのー♪」

作者さんどうにかしてー

作「断る」

何でだよっ！断らないでよ！

作「だってめんどいじゃん」

しばくよっ？

作「まあまあ落ち着いて」

作「この子の好きなようにさせてあげな」

返答が、出来なかった

兵「姫様。お迎えに参りました。」

「お前ら誰だよ」

俺はそう聞いた

兵「はっ。我々は」

「あ、ごめん察したからいいわ」

絶対凜蝶連れ戻しに来ただろこれ

兵「…」

「デートの続きしよーよ♪」

「そーだな」

兵「姫ーお待ちになってくだ」

「黙れ下郎が」※凜蝶

こいつ怖い。と初めて思った…だけどやっぱり可愛い。

「ねえさとりう〜」

「なに？」

「手繋ぎた〜い」

「好きにしな」

冷たく答える

「わぁ〜い♡」

ぎゅ〜

いや、これは手を繋いでるんじゃない腕に抱きついてるだけじゃねーかつ

「柔らかーい…」

お前の胸の方がよっぽど柔らかいわっ

…そうこうしてる内に城についた

プシューウウウ

「なんだっ?!」

「この…粉はー!」

「あの時の!」

「悟!助けて!嫌アアアア!」

「凜蝶あああ!!」

また、凜蝶がさらわれるのか

そんなの…嫌だっ!

「俺は何のために…こいつを好きになつたんだよ…」

「もうこんな悲惨な光景…見たくない!」

「俺は…凜蝶を助けるんだっ!」

俺の心が…燃えた。

「ウアアアアアア!!!」

自覚した。

俺は、人間では無くなってしまったと。

こうして、本気の魔界戦争が始まった。

二章『コレカラとイマカラ』

力が…爆発した

そんな事を思いながら凜蝶を助けに行く

「助ける」

そう眩きながら：城を破壊した。

案の定凜蝶は居なかったのだが

兵「ぐあああああ!!」

・・・見なかったことにしよつと

王「お前はなぜここに来た」

「凜蝶を連れ戻すためだ」

王「あの子は次期王女なのだぞ?」

「構わないね。あいつの事好きだから。」

王子「あの人は僕の物です」

「手出ししないでください」

「だまれヘナチヨコ野郎」

「どこにいるのか教えろ」

王「断る」

王子「ことわ」

「わかった。じゃあ決まりだ」

「戦争をしよう」

凜蝶「待って!」

王「なぜお前がここに」

凜蝶「黙れクソジジイ」

「ねえさとる!」

「?」

「あの王子の代わりに」

「うちと結婚して!」

王、王子、悟「なっ?!」

「…仕方ないな」

「わがままなんだから。」

「うるさい!」

「さーとーるっ♡」

とか言いながらキスしてきた

王子「こんなの…認めない!」

グサッ

なんの音だ…と思った矢先

「さと…る…グフツ」

槍が…凜蝶に刺さっていた

「うわああああア!!!」

王子「これで…お前の恋人など…」

「道具に過ぎなくなったなあ!」

ブチっ

その時俺は初めて

本気でキレた。

「黙れクソ野郎がああ!!」

「凜蝶を返せえええええー!」

俺は王子を真つ二つに斬った。

ここから、戦争が始まってしまうことになるなんて…

「凜蝶は…俺が助ける!」

平和な日常が、幕を閉じた瞬間だった。

三章『終わり始まり』

王子を…殺した

元はと言えば、これが戦いの原因になったのかもしれない。

「馬鹿野郎…」

と、自分に言い聞かせた

「お前なんか」「近付くな」「クソ野郎」

今までの記憶が遡ってくる。なぜかここに立ち尽くしていた。

だが、そんな事をしている時間は無い。

「早く…凜蝶を…助け…ないとっ!」

即座に周りの兵士を吹き飛ばした。住民が驚いている中、俺の「敵」を倒しつつ、凜蝶を探す。

こんな事しか出来ない奴でごめんな。

一方、凜蝶は

「ハハハ…ズハハ…」

確かうちは…悟と城に行つて…それでまたあの時みたい…
そんな考えが、彼女の頭をループする。

カーテンを開けてみると…

「ここは…」

「レイン郊外?！」

うちの住んでるところから…2万kmのところだ…。

うちは…また…悟を…

「起きられましたか、姫。」

そんな事を言われても…反応ができない。

「悟の場所に連れて行つて」

「それは出来ません」

答えられた。悟に会いたいの…どうしてみんなそういうの…

「会わせてよ!」

「無理なんですつて!」

何を言つても断られる。なんで?どうして?会いたいだけなのに

…。みんな…嫌い。

「悟…っ!」

「凜蝶ああああ!!」

その時、二人は繋がった。

「俺は」

「うちは」

シンクロして言葉を放った

「悟に」

「凜蝶に」

最も、繋がった瞬間だった

「会うんだああああ!!」

その時、二人の世界観が変わった。

四章 『恋の魔法』

恋はいろんなものがある。だけど…俺らは例外だった。

みんなは言う。恋愛してるー！とか、失恋しちゃった…とか。
俺らが作り出したものは、そんなアマチュアな物ではなく…とてつ
もない力を持った物だった。それが、

「恋の魔法」だ。

は？なんそれカッスｗｗｗｗとか思うかもしれない。

だけど俺らは起こしてしまった。

この世を変える騒動を…。

「姫様！何を?!」

「悟の所に…行ってくる」

「ダメです！姫さ」

シユパツ

凜蝶は悟に会いに行つた。

とんでもない事になつてる事も知らずに。

「悟！」

「…」

「ねえ！悟！」

「…」

「どうして…?返事してよ…」

凜蝶が、来た…。返事、してあげたい。抱きしめてやりたい。

だけど俺には…そんな力が残っていない。

王「我々が倒した」

「何ですって?!」

「…さいてー」

俺は何も出来なかった。約束も果たせず、ただ凜蝶を悲しませる
だけで…。俺は…泣いた。

「ねえ悟！」

「ご…めん」

「約束…まも…れな…かった」

「何言ってるの?」

「うちらはいつも一緒だよ?」

凜蝶がキスしてきた。こんな時なのに、何故か落ち着く…。

心が、熱い。

王「これは…まさかつ?!」

「恋の魔法…?!」

恋の魔法…か。聞いた事があるなあ…愛し合ってる者がキスをすると…その力は生まれる、と…。…いや、待てよ?愛し合ってる?

…俺いつの間にかいつの事好きになってたんだ…?

まあいい…。っ?!

力が…湧いてくる!?

「まだ…死んじやダメ」

「うち…こんなに」

「こんなに君の事、大好きなんだよ?」

泣きながら言われた。やばい可愛い。

んなこと考えてる場合じゃねえって!俺のバカ!

そして俺はまた、王と戦いを始めた。

五章 『君が好きです』

もう…負けられない。あいつが助けてくれたんだ…俺の事。

「王…お前の思い通りにはさせない!」

「俺はこいつを守る!」

王「ふんっ。どこまで耐えられるかな?」

悟、王「オラアアア!!」

そして、戦いが始まった。

耐えては攻撃。そのループだった。

俺が圧倒的に不利だと言うことは分かっている。だけどやらないと

…なにも始まらない!

必ず取り戻さないと…っ!俺はまだ、伝えてない事があるんだ!

「俺の邪魔を…」「するなあああ!!」

眼が…紅くなった。

王「まさか…」

「俺こそが…隻眼の死神だあっ!」

俺は正体を現した。どうやら王は混乱してるらしい。

王「お前に…死神の資格などっ！」

「俺には守らなきゃいけない人がいるんだよ！」

「それを邪魔されてたまるか！」

そう、俺には守りたい人がいる。凜蝶以外の…誰でもない。

俺にはあいつが必要だから…

「凜蝶！」

「…なに？」

「俺はお前の事が」

「大好きだ！」

「えっ」

そして俺は…倒れそうな状態で、王を倒した。

けどまだ、伝えてない…事が…。早く…言わなきゃ。

魔界の民「凜蝶様は我々の物だアアア！」

凜蝶「お黙りなさい！」

「あの人は…私が恋した者です！」

突然な発言に驚いた。

今しか…伝えられないなら…伝えるしかない！

「凜蝶」

「なに？」

「俺の…」

「？」

「俺の…家族になって下さい。」

凜蝶はキョトンとした顔で俺を見た。その後、泣きながら笑って

「うん…！」

「うちを悟のお嫁さんにして下さい！」

そのまま倒れ、その時俺は凜蝶に言った。

「君が好きです」

そして…意識が飛んでいった。

く天界編（第1の部）く

一章『君への想い』

あの後、見事に婚約を果たした俺だが…。（いや、そもそも婚約していいのかよ）まあ、結婚まで行きそうなわけだ。

「ねえ悟、ほんとに婚約するの？」

「そのつもりだけど」

「なんでうちなんかと…」

「好きだからだよ。わかる？」

いたって普通のことを言った。てかこいつの母親には許可とってるけど…親父さんがまだなんだよな…。天界まで行かないといけな
いのがめんどい。

「んじや、行くか。」

「うん！…あ、そうそう」

「なに？」

「プロポーズされた時、嬉しかったよ！」

…バーカ。そのプロポーズ受け入れてくれた事の方が嬉しいわ。

…つとまあ天界に来たわけだが

「だだっ広いなー…ここ」

「しようがないよー…天界だし。」

凜蝶はため息をついた。

凜蝶父「やあ。話は聞いているよ。」

「こんにちは。」

「やっほーパパ！」

凜蝶父「大きくなったなあ！」

「でしよー！」

親子仲良く会話してる…。物凄い平和だ。

「で、凜蝶の件ですが…」

凜蝶父「プロポーズしたらしいな、君。」

「はい」

全てお見通し、かよ…って結構怖いなっw

凜蝶父「君の目…、とても透き通っているね。」

「あの…お願いがあるのですが」

父（省略します）「なんだ？」

「俺は…凜蝶と婚約をしたいと思っています」

「本気で守ります。離れません。」

父「ほう。」

「凜蝶は、俺の大切な人なんです！」

「どうか！結婚させて下さい！」

言っちゃまったー。まだ中一なのにやっちゃったー。なんか落とし穴感半端ねえー。

父「…少年よ。その心、しかと受け取った！」

「さあ、凜蝶を連れていくが良い！」

「パパ！」

父「こいつはお前にふさわしい。」

あ…これ、結婚するのか。俺結婚しちゃうのか。だけど凜蝶となら大丈夫だな。

その帰り…俺は車に跳ねられ、死亡した。

二章『一緒に居てよ』

悟が…トラックに跳ねられた。なんで、どうして…。私は…泣いた。そして悟は救急搬送され、それについて行った。

「なんでこうなるのよ…」

その時だった。

ピーーーーーーー

死亡の音が…鳴った。

「いやああああ!!!」

その瞬間

「アラムうるせえんだよ！黙れ！」

悟が…生き返った？

え？なんで？どうして？ちよ、え？なんでこうなった？

「悟、どうして死亡音が？」

「これ外したから？」

とか、言いながら心電図に使うコードみたいなの出してきた。なんであんたが持つてんだよっ！とかツッコミたい。

「なんで、それを？」

「いやー、なんか気持ち悪いからさ。引き剥がしたわ。」

「馬鹿なの？」

涙が、止まらなかった。悟が戻ってきてくれたんだ。うちの前に：しっかりいるんだ。

「怪我は？大丈夫？」

「どこも痛くないな」

ジザベル「良かったよ」

俺のこと、心配してくれたのか。凜蝶もジザベルも。

「ありがとう。凜蝶、ジザベル。」

ジザベル「あつたりまえよ！」

「とんでもないよ、悟。」

「うちがあんたの妻になるんだか」

凜蝶を、抱き締めた。ほっとしたのと、お詫び、そして愛を感じるために。

「もうっ…甘えん坊な夫なんだから…」

胸に顔をうずめる。なんだろう、これが一番落ち着くのはなんでだ。

ジザベル「あと少しで死ぬとこだったって言うのに」

「随分のんきじゃないか」

そりやそうだよな。死にそうになってたのに彼女…いや、妻に甘えるなんてね。

「さあ、家に帰ろう？今日はハンバーグだよ！」

「やったー！悟のハンバーグー！」

平和になったな…本当に。

結婚式…挙げないとな。

三章 『時の意味』

結婚式当日

「おめでとうー」とか「お幸せにー」とか

みんな言ってくるけど、なんか違和感が…。それもそうだ。魔界で結婚式挙げてんだもん。w

もちろん俺の親は居ない。とうの昔に死んだから。

神父「では、誓いのキスを」

いやー、まだ心の準備が整ってねーよ。

ちゅーっ！

ま、案の定凜蝶からやってくる。てかディープはアウトでしょ。

すっごい嬉しそうな顔してやがるぞこいつw

「うち、悟のこと離すつもりないから！」

ぎゅーっ

あ、可愛い…じゃないじゃない。早くあれをしないと。

「じゃ、結婚もしたことだし」

「これを渡すよ」

と、俺は指を鳴らして時を止めた。そのまま凜蝶に指輪を付けて、時間を戻す。

「何したの？」

うわっww気づいてないこいつwwま、教えてやろうかなw

「手、見てみ」

「指輪だー!!!」

「キヤーー!!!」

おい、指輪あげたくらいでみんな叫ぶなよ。500万した事を知ってるから叫べ。

ーそして、式は終わった。正式に結婚したんだな、って思う。

「ねえ悟」

「ん？なーに？」

「結婚したしよ」

何を言い出すのか怖い。ま、いつも通りのキスのおねだりだろう。

と思いつつ聞いていると

「うち、あのね」

「子作りしたいな…って思ってるの」

ぶーっ!!!

思わず飲んでたミルクティー吹いちまった。これ結構美味しかったんだけどなあ…

「ダメかな…?」

すっごい悲しそうな目で見てきた。やめてくれ、OKしたくなるから。

「うち、ほんとに悟が好きだから…」

「悟と…したいの。孕みたいの。」

悲しい顔で言ってるけど…相当すっごい事言ってるぞ?!

「子作りしたいの!」

「わかったわかった」

「だけど、ほんとにいいのか?」

「うん!悟となら出来る!」

そんな話をしながら、家に帰った。

四章 『君との関係』

家に帰ったはいいものの…凜蝶が完全にやる気満々だ。

「うち、何回出されてもいいよ!」

「何言ってるんだよw一回に決まってるだろ?」

「えー!10回くらいやりたい!」

何の話か分からないやつには平和に見えるだろう。ただの仲良しにしか感じないのだから。

これから、子作りが始まるなんて思ってたすらいないだろう。

お互い服は来ている。これが重要と健ちゃんが言っていた…って、そんな知識いつ手に入れたんだ?と思ったことは静かにしておこう。

「うちの事…もつと見て?」

言われるまでも無い。小柄の割にしつかり主張してくる胸、キュッ

と締まったくびれ。それでいて、魅力的な脚…こんな人が居るんだなあって思ってしまう。

「胸…触って?」

いや、待て。この大きさに手を埋めたら…もう出てこれないぞこれ。

そのまま、鷲掴みにして触ってみる。

むにゅっ

「あうっ」

むにゅむにゅ

「そんな強く…しちや、らめえ…」

しばらく触っていると、桜色の突起が出てきた。これを触らないやつはいないだろう!

キュッ!

「はあうっ!」

「はあ…はあ…」

クリクリ

「ああっ!ダメえっ!」

スコスコ

「やらあっ!シゴいちやらめええええ」

「そこ、そこ弱いのおおお」

クリクリ、スコスコ

「そんな、両方同時にっ」

「ああああダメ!イツちやう!」

「イクッ!イツちや、アアアアア!」

ビクビクっ

あ、イツた…あ、待て。まだ20%しかやってねえ…。このまま10回もやんのか?

ま、もう少しいじろうかな…。やばい、楽しいこれ

そして俺は凜蝶の突起にキスをして、一気に啜りあげた。

「だ、ダメえええ!敏感になってるから、らめ、ああっ」

(気持ちよすぎて頭回らないよお…)

「何言ってるの？」

王子「姫、こんな奴すぐに殺してあげよう」

「僕が孕ませるから」

「そっちの方がよっぽど嫌よ！」

「うちは悟の子供を孕みたいの！」

凜蝶が…叫んで思いを言ってくれた。

「ほら！悟…も…」

八つ裂きにされて倒れてる俺見たら…そうなるわな

「ちよつと悟！ねえ起きて！」

「起きてっば！」

あ…俺死ぬな…これ

ガチャ

玄関の扉が開いた。誰だ…こんな時に…

「さとつち！電話出ないから来た…け…ど」

「嫌…嘘でしょ…こんなの…」

理緒だ…。あいにく反応が出来ない

「悟！ねえ悟！起きてよ！」

「さとつち…死んじやダメだって！」

「ごめん…凜蝶、理緒。もう…ダメだ…」

「2人とも…大好きだ…」

そう呟きながら俺は、死に至った。